



生物資源学科

生物資源経済学研究室

Laboratory of Agricultural and Resource Economics

STAFF

教授 磯前秀二
生物生産経営学、農政学、
生物生産経営学特論(大学院)

准教授 平児慎太郎
食品経済学、生物資源経済学、
生物資源経済学特論(大学院)



教授 磯前秀二



准教授 平児慎太郎

研究内容

“生物資源経済学”という分野の位置づけ:

-なぜ、理系学部の農学部に経済学の研究室が置かれているのか?-

○先人が獲得した食料・農業問題に関する経済学的な知見を農学に係わる次世代に継承し、社会の効率的発展に貢献する。

○細分化・先端化する農学諸分野の成果が、社会において普及・定着するための条件は何かを解明する。

→いずれも社会に係わる問題であるため、経済学をはじめとする社会科学的な問題意識や分析手法が必要となる。

主な研究テーマ:

[中山間地域における稲作収量リスクの確率分布とその評価]

条件不利地域-主に中山間地域-における農業生産の脆弱性や不安定性を解明すべく、稲作収量リスク(収量変動)に着目し、作況指数の確率分布をStochastic Dominanceモデルを適用して計測、評価する。

→計量経済学、金融工学やリスクマネジメント分野で開発されたStochastic Dominanceモデルを援用することで手法的な普遍性と水準を担保している。また、収量リスクを定量的に評価することを通じて、地域農政や経営政策を策定する上で有益な政策情報となり得る等、多くのimplicationを有している。

[条件不利地域における農業構造と資源管理]

条件不利地域を農業集落レベルで捉え、その構造と資源管理、特に耕作放棄地発生メカニズムを解明するとともに、その発生抑止に向けた政策対応のあり方について解明する。さらに、景観や集落機能をはじめとする地域資源の保全・管理に向けた取組について考究する。

→高齢化やそれに伴う担い手不足が耕作放棄地率を高めている等として、耕作放棄地は専ら経営の問題と認識されてきた。しかし、分析結果から、むしろ高齢者の割合が高い集落であっても、そのアクティビティが高ければ衆人環視が機能するなど、集落機能が維持できていれば耕作放棄地が高まることを抑止できる、との結果が得られた。すなわち、条件不利地域農業のあり方を考究するためには、古典的な農業構造論に留まらず、農村社会やソーシャルキャピタルの問題として拡張して捉える必要が迫られている。

[最適借地期間]

日本農村では急速な人口減少・高齢化が進行している。このことへの対応として日本農村への外国人移民の必要性を説く向きがあるが、的外れである。農村の人口急減とはすなわち農業経営規模拡大ニーズの急速な高まりであり、強い日本農業構築の時機と捉えるべきではないか?

→一般の株式会社が借地により農業経営する場合の基礎理論を研究している。

[大局観に立った農政]

一般の株式会社農業経営については、労働生産性を大きく向上させる十分な投資を行わせるために、農地購入を認める構造改革(広域)特区を広く認めてはどうか?

→現在のように農地賃借では十分な農業投資は実行されず、生産性や付加価値の飛躍的向上は困難である。法人では農業生産法人のみ農地購入を認めるというのでは、日本農業全体としての投資は不十分になる。こうした視点から、大局観に立った農政を研究している。

最近の主な論文・著書／磯前秀二(共著)(2016)『日本史の中の世界一 第2版』育鵬社。

・磯前秀二(共著)(2016)『もう一度学ぶ日本史』育鵬社。

・磯前秀二(共著)(2015)『新編 新しい日本の歴史』育鵬社。

・平児慎太郎(2016)岐阜県における耕作放棄地の発生要因・パネル分析による接近、開発学研究27(2),64-69。

・平児慎太郎(2016)遊休農地の発生要因と対応岐阜県飛騨地域を事例として、開発学研究27(1),2-9。